

THE ULICS TIMES

vol.16

神大附属図書館 おすすめスポット紹介！

鼻腔をくすぐる、どこか懐かしい本の古びた匂い。息を抑えて慎重にページをめくる音、穏やかに手元を照らす日差し一筋、色鮮やかな背表紙の数々……。

図書館は、本を収蔵することによって私たち来館者に過去の叡智を伝え更なる発想力の展開を後押ししてくれるだけでなく、その様々な空間的要素を通じて、知的好奇心や高揚感を掻き立てたり、精神的な充足感を与えてくれます。

その中でも、特に大学図書館はその多機能性と空間の広さから、一般的な市民図書館とは一味違った様々な魅力を提供してくれるのではないのでしょうか。

そこで、今回は私たち神大生が日頃お世話になっている附属図書館の魅力を十二分に伝えるべく、ULiCS部員目線でおすすめスポットをたっぷりご紹介！

本記事をご覧になった方は、ぜひ所属学部 of 図書館だけでなくあちこちの図書館に足を運んで頂き、あなただけのお気に入りスポットを見つけてみてはいかがでしょうか？

六甲台キャンパスと鶴甲キャンパスの
図書館をいくつか調査！
皆さんは利用したことありますか？



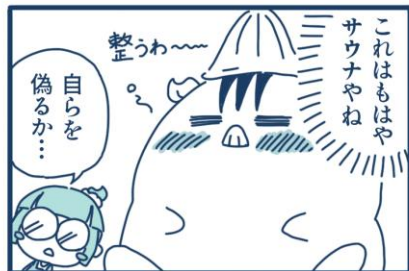
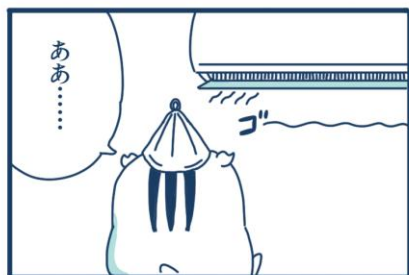
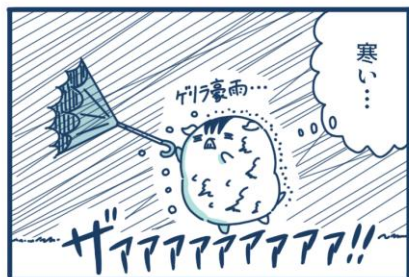
総合・国際文化学図書館

返却本棚前の休憩スペース

入口すぐの受付を通り過ぎて右奥に、返却された本や過去の新聞が並ぶ小スペースがあります。私は授業と授業の間の20分休憩や、帰りのバスを待つちょっとした時間に、ソファに座ってよく返却図書をぺらぺらとめくっています。ラーニングコモンズや上階の閲覧室と異なり、人が多くたむろする場所ではないので、時間の流れがゆっくり感じられリラックス効果抜群！時々学外の一般利用者が新聞を読まれる姿も目にします。

休日開館日には、ソファでご飯を食べることができますよ～

(国際文化学研究科修士2年 ULiCS部員の声)



2025年4月発行

神戸大学附属図書館学生チームULiCS



<https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

@ULiCS_KobeU_Lib



ULICS

検索

ULiCS文庫

他館にはない、国際文化学図書館独自の大きな強み！それは我々がULiCSが本紹介の場として続けている、『ULiCS文庫』です。(写真左側/上記事の休憩スペースの手前にあります)

時期によって展示するテーマが異なり、部員一名でお気に入りの本を揃えることもあれば、THE ULiCS Timesの書評で紹介された本や、学生選書ツアー(毎年開催している、神大生が国際文化学図書館の蔵書を書店で選ぶイベント)の購入本を展示していることも。昨年春には、出だしの文章で惹かれた本を手にとってもらう企画「はじまりの一文」が開催されました。

神大生が推薦する本のラインナップが知りたい、そんな貴方にご案内したい空間です。



AVブース

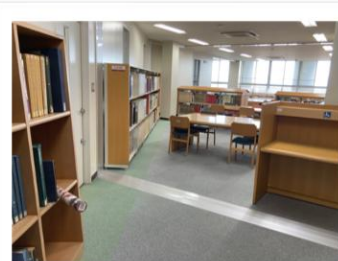
勉強や読書をするには疲労がたまっているけれど、ちょっとした空コマに楽しいことをしたいと思っている貴方。そんな時には、AVブースで一息つくことをお勧めします！

3階の最奥スペースには、様々なジャンルの映画や音源が揃えられており、備え付けのヘッドフォンとモニターでお手軽に映画鑑賞が出来ます。閲覧室で課題を進め、終わったら隣のスペースに移動して優雅に映画を嗜む大学生生活も、たまには良いかもしれませんよ。



大型図書閲覧スペース

神大の中核を為す総合図書館だけあって、座席数もかなり用意されている一方、いつもは勉強熱心な神大生で机の大半は埋まっている印象。でもこちらは大型図書棚に囲まれた隔離スペースとなっており、人も少なく巨大な本をゆったりと眺めることができますので、時間を忘れるほど本の美しいイラストにのめりこむことができます。写真手前右側には拡大読書器も設置されているので、資料に載っている図をもっと詳しく見たい！という方は、是非利用してみてくださいね。



海と山に囲まれた自然豊かな立地と、私たちの研究をサポートしてくれる沢山の蔵書！神大の図書館ならではのですね。

人文科学図書館

雑誌閲覧室

文学部棟内に位置する人文科学図書館はいくつかの閲覧室を有していますが、1階の最奥部には雑誌閲覧室が位置しています。そこは屋外に面した大きな窓に沿うように、十数の閲覧用机が連なっている細長い空間です。他と比べると空間幅は狭いですが、細長さを活かすように縦に机が並んでいるため、作業中は左右の動きなどが気にならず、自然と集中力も高まっていきます。もちろん名前の通り、机と反対側には文学部の専修にゆかりのある雑誌が飾られた棚もあります。小休憩として様々な表紙を眺めてみるのも楽しいです。窓から暖かな日が差す時間帯には昼寝の誘惑にかられそうになることもありますが、それもこの場所の心地良さを表しているでしょう。ここでは行き詰った課題も調子よく進み、充実した“図書館時間”を過ごすことができます。

(人文学研究科修士1年 ULiCS部員の声)



社会科学系図書館

図書館雑誌閲覧室

社会科学系図書館雑誌閲覧室奥をおすすめします。
社会科学系図書館雑誌閲覧室の奥には、周りが見えにくいブーススタイルの席が設置されています。各席にはコンセントが付いており、また、車椅子用の方も使える広めの席もあります。
さらに、クッションのある椅子も併設されています。そのため、読書や勉強に集中しやすい環境になっています。
近くの禁帯出の社会科学系の専門雑誌を読む際にもおすすめです。
(法学部4年 ULiCS部員の声)

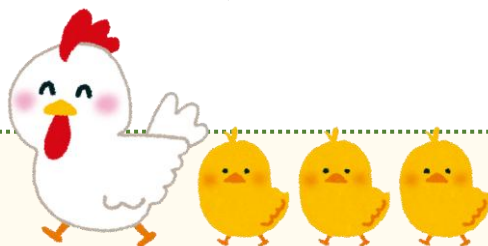


BOOK REVIEWS

書評テーマは、「懐かしい本」！

皆さんは、昔読んだ本を図書館で発見して懐かしく思ったり、家にある本を読み返しては最初に読んだ当時のことを鮮明に思い出すことはありますか？

今回はジャンルを問わず、ULiCS部員にとって特に懐かしく感じる本について、個人の思い出を交えながら紹介してもらいました！



工藤ノリコ『ピヨピヨスーパーマーケット』

佼成出版社、2003年

タイムセールに気を取られた母にわたりの隙をついて、5匹のヒヨコたちがスーパーマーケット中を駆け回ってだいすきなお菓子たちをかごいっぱいに入れていく。そんな様子がとにかく可愛くて微笑ましく、そして3～5歳頃の私にはどこか羨ましかったのかもしれない。当時はこの本ばかり何度も繰り返し読んだものだった。途中からはお話だけでなく、絵を見ながら自分がもしそのスーパーマーケットに行ったら何を買おうか（買ってもらうか）と妄想もした。この絵本は店内を描いたイラストも魅力的で、スーパーマーケットに置かれた商品の種類も豊富なのだ。

結局幼い目論見は実らず、それぞれひとつだけお菓子を買って与えられるヒヨコたち。俯きながら家路を歩いたヒヨコたちだが、母にわたりの用意した立派なディナーを前に大喜びする。この切り替えの早さも可愛いところである。憧れたこの一家の晚餐を再現してもらったこともある。

年を経て再び開くと、もちろん今でも魅力的なスーパーマーケットだったが、今度は当時と違う見方で絵本を楽しんだ。草食動物のお客さんのかごには肉類は入っていないし、水族館にいるような動物のお客さんは新鮮そうな魚をいくつも買おうとしている。幼い目には気が付けなかった芸の細かさに感動し、そして今よりいくらか安めの価格表示に何ともいえない気持ちにもさせられた。絵本は開いたその時々によっていろいろな楽しみ方や見る視点があるのだということを実感した一冊でもある。

(人文学研究科 修士1年)



ダレン・シャン『ダレン・シャン1 ー奇怪なサーカスー』

橋本恵訳、小学館、2006年

私は「ダレン・シャン」シリーズを紹介する。バンパイアであるクレスプリーの元から蜘蛛を盗み出したのをきっかけに、半バンパイアとなった少年、ダレン・シャンの物語だ。親友との出会いや初恋の話、バンパニーズ（バンパイアとは信念を異にする吸血鬼たち）とバンパイアとの戦いと、盛りだくさんな内容となっている。

大事な人物の死やグロテスクな描写もあり、児童書にしてはダークな内容だが、だからこそ、子どもをひきつける部分もあるのかなと思っている。

私自身、小学2年生の時に、「大人っぽい本が読みたい」「ダークな本を読みたい」という気持ちから、分厚く、ハードカバーだった「ダレン・シャン」シリーズを手にとった。

表紙も、実写のようなイラストで、大人に憧れる子どもだった私にとっては、とても魅力的にうつった。最初はシリーズを読み切るまで数年かかった覚えがある。「奇怪なサーカス」（1巻）では、蜘蛛のマダム・オクタや、フリークショーの奇怪な登場人物にドキドキしながら読んでいた。そのころから、蜘蛛を殺せなくなり、未だに部屋の中にも、目で追うだけになっている。

（法学部 4年）



エクトル・マロ『家なき子』

波多野三記訳、集英社、2006年

子どもは児童文学を通して、未だ経験したことのない冒険譚に心奪われ、時に主人公の境遇や選択に涙し、その道行きをはらはらと見守る。おとぎ話であることは分かっているのに、主人公に強く感情移入し、読んだ後何日たってもあの世界から頭が戻らない！皆さんはかつてそんな経験をしたことがないだろうか。

ここで、私が小学校低学年の頃に夢中になった児童文学を紹介したい。

それは『家なき子』だ。フランスの小さな農村で母親と穏やかに暮らしていた少年レミは、捨て子だからと自分を忌み嫌っていた放浪者の父親にその身を売られ、旅芸人のおじいさんと動物たち数匹で各地を転々とする事となる。

小公女セイラ、みなしごハッチ等の物語を始め、童話は時折、主人公を孤独な状態に陥れ読者に絶望感を与える。しかし、レミはこれら物語の中でも、屈指のタフな心を持っており、絶えず読みに希望を与えてくれる。レミを引き取ったのち、処世術としてレミにハーブの弾き方を教え一心に愛情を注いでくれたおじいさんが無実の罪で牢屋に入れられた時も、旅仲間の動物にピンチが訪れたときも、レミは弱音を吐かない。むしろ、持ち前の優しい心と「お母さんや仲間会いたい」という強い願いを武器に、心を許せる友達を作りながら沢山の街を渡り歩く。母親にべったりだった当時の私は、それほど自分と年が変わらないような主人公が、周りの人々の知恵を借りながらもたった一人で旅を続けていく、その勇気と行動力に大層驚かされた。

（国際文化学研究科 修士2年）